

第8回会議で出された主な意見

【北九州市の教育のあるべき姿・目指すべき姿について】

(10年後のあるべき姿・目指すべき姿(目指す子ども像等)に関する視点)

今、一番問われているのは、徳育の中でも人とのかかわり、社会とのかかわりということで、「思いやりの心」というものが欠けている。この「思いやりの心」というものを強調してほしい。

学校の教育の上で挫折というものがあり、思いつめて自閉になることがあると思う。そこで、かなう夢、絶えず夢を持つことで、いろんなことを克服することができるのではないかと考えている。

一番大切なのは、人から愛されて、人間に対する信頼感があるということだと思う。

「北九州は人に優しい」というようなことを前面に出してほしい。

学校・家庭・地域ということで考えられているが、教育というものは就学前から始まっていることなので、学校と言い切るのはいかがでしょうかと思う。

生まれたときからのベースがあり、就学前の教育があって、その後、学力、体力を付け、知識、徳育、徳力を付けていくと思う。このため、就学前からの教育というのは絶対無視してはならないと思う。

10年後のあるべき姿等の「学校」について、「時代に即した北九州らしいよりよい教育環境を提供し」まではよいが、そのあとの「子どもの教育に関わる家庭や地域の拠り所としての役割を果たす」については、「何でも学校で」と受け取れる。

学校は教育に関わっているので、保護者や地域と連携し、相談しながら子どもをしっかりと育てるところは分かるが、「拠り所」となると少し厳しいと思う。

家庭は家庭の教育力、地域は地域の教育力というようなところも、ぜひ見てほしい。

10年後のあるべき姿・目指すべき姿において、行政がどういうふうに関わっていくのかが見えてこない。行政が直接的に教育にアクションを起こそうとすると、学校が一番直接的であり、「拠り所」という表現もせざるを得ないというようなことは理解するが、行政は、家庭や地域に対してどのような立ち位置に立つのか見えない。

教育を取り巻く当事者というのは、児童・生徒、保護者、教職員、地域住民、企業だけではなく、行政が主体の姿をもって望むべきと思うが、その姿が見えていないと思う。

10年後のあるべき姿等の「学校」について、「時代に即した北九州らしいよりよい教育環境」というのがよく分からない。また、今の北九州市の現状を考えた場合、あるべき順番としては、一般的な学校・家庭・地域ではなく、家庭を一番最初に持ってくるべきではないかと思う。

また、「生きる力」という文言に関しては、いろいろな楽しいこと、苦しいことなどたくさんある中で、目標に向かって乗り越えていく力を付けてあげることが私たちの役割であり、また、行政もそれを支えていくという役割があると思う。

目指すべき子ども像の“北九州っ子”にこだわるべきと思う。北九州をこれから背負っていく子どもたちが、どういう子どもになってほしいのかというメッセージをここで書くべきと考える。「充実した～可能性の引き出された子ども」ではあまりイメージできない。

いろいろな子どもを均等にする必要はないと思うので、アジアで活躍するとか、個性あふれるなどの言葉があるべきと思う。市民が“北九州っ子”ってこんな子どもになってほしいということを、ここにメッセージとして訴えることができればよいと思う。

せつかく10年後の未来像をつくるのであれば、“北九州っ子”というのは、学校ではこんなことをしている。家庭ではこんなことしている。」など、保護者が見て読んで理解できるようなものにするべき。特に学校や家庭のあり方などは、分かりやすい文言にするべきと思う。

目指す子ども像で、“北九州っ子”というタイトルはよいと思うが、立派な表現であるより、10年後に北九州が一番になるために、イメージできる言葉にする必要があると思う。読んだ人の心を動かせるような言葉ができればよいと考える。

(本市の教育の目指すべき方向性(各主体の姿)に関する視点

「子ども」という表現と「児童・生徒」という表現がそれぞれ入っている。

子どもの中には、幼稚園が含まれていると思うので、「児童・生徒」という表現の中に幼児を含んだものかどうかなどが分かりにくくなっていると思う。

10年後のあるべき姿等の中の「地域」には企業が含まれるのかわからない。目指すべき方向性(各主体の姿)では、地域住民・企業と分けて記載されている。

子どもと接触できる親の時間がなければ、子どもは健全に育たないので、企業の協力というのは絶対不可欠だと思う。そういうことから、あいまいな表現では分かりにくいと思う。

北九州のパンフレットを見ると、すべて「学力」、「体力」のあとには、「心の豊かさ」とか「豊かな人間性」という言葉が書かれている。言葉としては、「学力」「体力」「徳力」ということで統一するべきと思う。

「徳」という言葉は、「素直な心」と書かせて「とく」と読ませていた。「徳」という意味をしっかりと理解したら、徳育というものがもっと中心になっていくと思う。

大半の保護者が、今、一番子どもに望んでいることは、「健康な心」であると思う。それは、元気でにこにこしている、毎日楽しいと言いながら学校に通っているという、そのあたりを求めている人が圧倒的に多いような気がする。

学力や体力が先行しているように見えてしまっており、そうではなく、もうちょっと違う順番があったり、違う視点があるのではないかと思う。

【子どもの学力、体力、特性を伸ばす学校教育のあり方について】

（専科教育に関する視点）

専科教員による指導が実現すると、子どもたちの授業に対する興味や関心意欲は大いに高まり、より分かる、できる授業展開となる。

また、専科指導を行うには、教諭もしくは常勤（非常勤）講師の配置などの人的配置が必要である。

専科指導を行う中で、非常勤講師枠が取れたとしても、本当に配置することができるのか疑問がある。教員を探してもいないというのが実態で、教員確保というのが大きな課題になってくると思う。

自分が小学生のときには、クラス数も多い時代だったが、体育、音楽、美術、家庭科でそれぞれ専科の先生がおり、授業を受けていた。その中で感じたことは、普段の担任と違って、違う大人に触れるということはすごく楽しみだったような記憶がある。

子どもの視点に立ったときには、プラス面はすごく大きいものがあるように思う。

世の中の流れというものが、どんどん細分化され、科学も技術もどんどん進歩していることを考えた場合、先生が全教科を受け持つということでは、相対的に教える側のレベルというのが非常に遅れていき、また、負担になるのではないかと思う。

英語やパソコンの導入など、世の中の流れがどんどん動く中、時代の流れとして専科の方向に行くということがいいのではないかと思う。

専科教育はすごく賛成であり、仕組みを成立していければいいと思う。

保育園では、養護から教育まで全部していかないといけないが、1人の職員ですべてを行うことは無理である。いろいろな人に手伝ってもらうことで、子どもたちも多様な人と関われるし、心の中にも多様性が出てくると思う。

企業には、有給休暇を使わずに企業が地域に貢献しようとする「ボランティア休暇」という制度がある。当社の中には、海外勤務により英語がすごくできる者や、パソコンの域を超えシステム開発などを行える者もいる。

そこで、学校授業のうち、月1回くらいは民間企業でも協力できることを、ぜひ、させていただきたい。学校の先生にとって1時間でもゆとりができることは非常に重要だと思うし、そういったことを北九州市の特徴として提案できればどうかと思う。

市民センターにおいては、ボランティアという形で読み聞かせを行うグループもある。初めは、近隣の小学校の昼休みの時間に読み聞かせを行っていたが、今では、二つの小学校に、1、2年生の国語の授業時間にグループで入っている。

学校を支援するということでは、企業の支援もあるが、地域のボランティアもできることがあると思う。子どもたちも声を掛けられることをすごく喜んでいるし、ボランティアも達成感がある。今後もこのような支援が広がっていければいいと思っている。

(小中一貫的教育に関する視点)

本市においても、5、6年生時の小中一貫による教科担任制をぜひ、取り組んでほしい。小学校教諭も中学校の教科免許を持っており、小中学校教諭が交流し、一部教科でも小中学校で受け持つ仕組みが整えば、「小学校における専科指導の推進による学力や体力の向上」、「中1ギャップの解消」、「複数教員による子どもの見とり」、「9年間の教育課程の一貫性」、「教諭の指導力の交流による向上」など多くのメリットがある。また、子どもたちを小中協働で育てる地盤が確立することとなる。

小中一貫的教育という点について、小学校教諭が、例えば中1プロブレムのギャップを解消するために小学校6年生と一緒に中学校に行くということは理解できるが、中学校では、小学校の教諭は道徳など以外では、なかなか教える教科がないという現実があるのではないか。

小中連携と同時に幼保小連携ということを行っており、そういうことから考えると、幼保小中連携という12年間のスパンであれば、子どもの成長を見届けることができるのではないか。また、併せて健康診断表も12年間のスパンで見れば、子どもの成長ということに気を付けることができると思う。

(その他の視点)

生徒指導のあり方について、現在では、細かく決められているが、ほんとの生徒指導とは何なのだろうかと疑問に思っている。一切規制を外してしまった学校もあると聞いているが、今は、生徒指導のやり方を一面的に考えていると思う。

生徒指導などを通して一番大事なのは、自己肯定感ができることだと思う。この人ならば信頼できるということ、それが育たないと日本一の教育はできないと思う。

学校5日制により、運動会や学習発表会などへの取り組みをする期間がすごく短くなっていると思う。短期間で集中的にやっており、子どもも保護者も楽しそうに感じない。運動会などでは、人のいろいろな面が見えたり、新しい出会いがあったり、先生との違うつながりが生まれるなど、心豊かになる面もあると思うので大事に考えてほしい。

学校公演などがすごく少なくなっている。北九州の子どもたちにとって、子ども時代の感性豊かな時に芝居などを見ることなどの機会を保障していくということは、子どもたちのいろいろな能力を伸ばすということにつばがるのではないかと思う。

今回の資料に「北九州市学力向上検証改善委員会」の報告がなかった。同委員会では、学力に関する全国平均や北九州の平均に関して相当な分析を行っている。今回は、学力をどのようにつけていくのかという議論全般にはなっていなかったような気がするので、もう一度議論の場を設定してほしい。

北欧では、小1プロブレムに対応するような形で学校の余裕教室や空き教室を使い、就学前の段階で0年生という形で学校の先生と保育士又は幼稚園教諭の2人がセットとなり慣らし学校のような形を行っている。小学1年生の4月から、きちんと学校教育の内容に入っていけるようにするためにも、そのような工夫があってよいと思う。